

# 金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

## わたし色

生活情報誌「悠悠と」  
編集長・真鍋康利さん



「這えば立て 立てば歩めの親心」という言葉には、親が子供の成長を願っている様子がうかがえます。それにも増して、孫は「目に入れても痛くない」と言われるように、特別な存在のようです。私自身は孫がいないのでよくわかりませんが……。

ジジ・ババは、赤ちゃんが目も開かず首も据わらないうちランドセルや大きめの服を買って、生まれてすぐ離乳食を用意した人もいます。とにかく赤ちゃんに関しては、すべての明日が「明るい日」で、楽しみがいっぱいなんです。

高齢者向けの調理済み食品があります。軟らかく、栄養のバランスもよく、しかも最近は見たい目も一般的な料理とほとんど同じようなんです。

その出始めの頃、メーカーの方と話す機会があり、「離乳食は売れるが高齢者向けはいま一つ」と聞きました。基本的には両者ともよく似ているように見えます。

ある日年配の皆さんに集まってもらって、試食会を開きました。「レトルトパックのアルミ臭はちょっと」という声があったものの、料理そのものはおおむね好評。しかし、ある女性が「でも私はまだ結構よ」と言いました。自分で

行しながら言うのもなんです。が、「高齢者のため」という言い方はしない方がいいのかもしれない……と思いが始めている。

高齢者の方に「あなたのために作ったのだから、ありがたく食べなさい」と言っても、私はまだ必要ないと言います。高齢者用食品を食べることは「明るい明日」ではなく「暗い」と受け止めるのでしよう。私たちの明日が暗くいいはずはありませんね。

そこで「高齢者向け」や「介護用」とせず「ユニバーサル食品」にしては、と提案しました。元気な子供が熱を出して寝込んだ時、二日酔いのお父さんに、または登山に持っていく、そんな商品です。栄養バランスがよく、のどを通りやすいので、どの場面でも役立つそうです。「ユニバーサル食品」という名前なら抵抗も少ないでしょう。

自分の口から食べることは生きる源です。おいしいものをおいしく食べられるうちはまだまだ大丈夫。最後の晩餐に何を食べるかを考えながら、明るい日が少しでも長く続くよう頑張っていきたいと思います。ちなみに私の場合、最後の晩餐はトンカツに決めています。